

国名 タイ
指導科目 皮膚科学
派遣先機関 国際皮膚科学研修コース
(国立皮膚病研究所)
専門家名 小川秀興
赴任時現職 順天堂大学皮膚科学教室教授
派遣期間 1983. 8. 1 ~ 8. 12

業務報告書

(1) International Dermatology Training Course に於ける講演並びに技術指導 (本コースの概要)

アジアの皮膚科医の養成(医師免取得後の専門医研修)を眼目として、タイ国政府(D T E C)の後援の下、国立皮膚病研究所を研修所とし、アジア十数ヶ国からの皮膚科医を対象として、約3ヶ月間、皮膚科の臨床、研究を教育するものである。

既に過去5回開催されており、今年度はタイ、インドネシア、スリランカ、韓国、中華人民共和国、パングラデシュ、フィリピン等より、22名の皮膚科医が参加していた。

(担当講演又は技術指導項目)

私の担当は、研究皮膚科学で、内訳は、

- ① 皮膚水疱症の臨床診断、治療、病態生化学及び将来の完全治療への見通し<約4時間>
- ② 皮膚の構造と機能、それを踏まえた角化異常症の病態生化学<約4時間>
- ③ 角化異常症の分子レベルでの解析とそれに基づいた治療へのアプローチ<約4時間>
- ④ 皮膚真菌感染症の分子生物学的解析<約4時間>
- ⑤ 皮膚科学領域における最近のトピックス
(発癌機序、老化機序、自己免疫疾患の最近の治療法、角化異常症の治療法、先天性皮膚疾患の診断と治療……………等)<約4時間>
- ⑥ 講演に引き続き、各コマ約1~2時間の質疑応答。
- ⑦ フリーディスカッション

以上であった。

(対象者の水準並びに反応)

語学能力のバラツキが目立ったこと、とくに中国からの参加者の英語力が低かったので、ポイントのくり返し、時によっては漢字を併用するなどの配慮を行った。しかし乍ら、参加者はいずれも各所属機関長及び所属政府の推せんを受けたものなので、受講態度は極めて熱心で理解力も高かった。

質疑応答は極めて活発で、しばしば時間を超過したというより、常に1時間程度オーバーとなった。

(2) International Dermatology Training Course

<Diploma Course of 10 month> 開設への最終的折衝

上記の3ヶ月コースは1983年をもって一応終了し、1984年より新たに10ヶ月コースが新設される。これはタイ国政府(DTEC)と日本国政府(JICA)の共催となり、我が国の学術担当内容は10カ月中3ヶ月間の研究皮膚科学の講義実習となる。その為、JICA, DTEC, 両国学術担当責任者(我国では私)との間で折衝がもたれ終結した。

業 務 日 誌

月 日	曜 日	内 容
8. 1	月	成田発(CX501) 11:15-18:00 バンコク着 ① 出迎えのタイ国皮膚病研究所の車にて宿舎(Narai Hotel)着。 ……税関の入国手続き異常に長し、何とかならぬか? ② 皮膚病研究所 所 長 Dr. Renoo 上級医 Dr. Pimongpang 事務長 Mr. Vi chen 氏らと業務打合せ会議を兼ね夕食-業務費支出
8. 2	火	午前 ①出迎えのJICAの車にて JICAへ出頭、川上氏、河西所長等と打ち合せ。 ②大使館へ挨拶。 ③Dermatology InstituteにてDr. Renoo所長と昼食。 午後 ①(講義)皮膚水疱症の臨床診断、治療、病態生化学及び将来の 展望、 質疑 PM1:00~5:00 ②小木曾日本国大使招宴により、JICA所長等と会食。
8. 3	水	午前 ①出迎えのDermatology Instituteの車でInstituteへ。 Senior Staff と Course(新設)について、カリキュラム 検討。昼会食。 午後 ①(講義)皮膚の構造と機能、角化異常症の病態生化学、 質疑。 PM1:00~5:00

月	日	曜日	内 容
8.	4	木	<p>②タイ国医務局長Dr. Komolの招宴（小生の歓迎パーティ） 皮膚病研究所長始め研修コース全員が出席</p> <p>午前 JICA 川上氏 Renoo 所長 と業務打合せ</p> <p>午後 （講義）角化異常症の分子レベルでの解析とそれに基づいた治療 へのアプローチ 1:00~5:00</p> <p>夕 Dr. Pimongpong と会食 10ヶ月コースへの卒直な意見の交換とタイ国皮膚科の国内事情 の説明。</p>
8.	5	金	<p>午前 Dermatology Institute の医師及び3ヶ月コース参加の各国 皮膚科医と患者検討。 （質疑応答）各種皮膚疾患の診断と治療への最近のトピックスの解 説</p> <p>午後 （講義）皮膚真菌感染症の分子生物学的解析 1:00~4:30</p> <p>夕 皮膚病研究所長と会食 業務打合せ</p>
8.	6	土	講義の整理と問題点の検討 休養
8.	7	日	
8.	8	月	<p>午前 （講義）皮膚科領域における最近のトピックス とくに、発癌機構について</p> <p>午後 DTECにて10ヶ月コースの業務打合せ、協定書の検討 （日本側）川上氏（JICA, バンコク）、伊藤氏（JICA, 東京）、 小生、後藤書記官（大使館） （タイ側）皮膚病研究所長、DTEC 役人2名、大筋について合意、細 部は東京JICAに指示をあおぐ。</p>
8.	9	火	<p>午前 Institute にて問題患者の診察と助言</p> <p>午後</p> <p>夕 シリラー病院、マヒドン大皮膚科教授Dr. Melani 宅に招宴。 バンコク皮膚科医（Institute 所員以外）10数名と会食。 ジャパントイムム、Dermatology. News 記者団氏東京より来 る。会合。</p>
8.	10	水	International Dermatology Training Course

月	日	曜	日	内	容
				<p>10ヶ月コース協定書調印式に列席 (日本側) JICA 河西所長 (タイ側) DTEC 次長, 医務局長 (上記無事終了につき)</p> <p>昼食 日本側の招宴にて会食 (日本側) JICA 川上氏 (タイ) " 伊藤氏 (東京) 大使館 後藤書記官 小生 (タイ側) DTEC 役人2名 皮膚病研究所 Renoo 所長 Pimongpong 医師</p> <p>夕食 タイ側の招宴にて会食。 DTEC 次長の招宴 (局長はバキスタン出張中)</p>	サイン
8.	11	木		<p>午前 帰国の挨拶参り。 午後 小生の為のサヨナラパーティー 皮膚病研究所主催。</p>	
8.	12	金		<p>バンコク発 (TG 740) 10:30~18:25 成田無事帰着 現地はクイーン誕生日にて休日にもかかわらず, 皮膚病研究所の車にて, 事務長の見送りをうける。</p>	

国名 タイ
指導科目 第三国研修（皮膚病コース）
派遣先機関 タイ国立皮膚病研究所
専門家名 小川 秀興
赴任時現職 順天堂大学医学部皮膚科学講座教授
派遣機関 1984.3.25～4.7

業務報告書

<背景説明>

タイ国立皮膚病研究所は12年前に設立され、7年前よりタイ国政府の後援により、上記研究所にて、タイ国皮膚科専門医の養成及びアジア、太平洋域諸国の皮膚科専門医養成を目指し、3ヶ月間1年の短期講座を開催しておりました。

従来、これら諸国は自国だけでは専門医育成が困難である為、ロンドン大学或いは米国に於いて開催されておりました Diploma Course of Dermatology (10ヶ月コース) に人材を派遣し、その育成をゆだねておりました。タイでの3ヶ月コースは経費が安く、手軽で（短期間）、しかも実質的には派遣人材枠拡大ともなり、過去7年間かなりの人気を博しておりました。教授陣はタイ国だけでは不充分の為、米英そして日本側からは私が過去3回 JICA ベースで受け入れられておりました。幾多の下交渉を経て、JICA そして現地大使館、外務省の積極的協力により、本年（昭和59年）3月末日より、

- ① Course を3ヶ月より10ヶ月に延長する。（Diploma Course とする為には最短10ヶ月が国際的に認知される期間となる。）受講対象国はアジア17ヶ国から公募する。
- ② JICA-DTEC 協力事業として、費用は折半する。
- ③ 研修場所は上記国立皮膚病研究所とする。教育カリキュラムのオーガナイザーは、Dr. Renoo (タイ側)、私 (日本側) として協力して作成、実行する。
- ④ カリキュラムは i) 5ヶ月間 Dermatology in General
ii) 2ヶ月間 Tropical Dermatology
iii) 3ヶ月間 Investive Dermatology と大別する。内、日本側は主として iii) を教授する。

以上が、Diploma Course of Dermatology の概略です。

〔A〕 本年は第1回目に当る為

- ① 発足式（タイ国厚生省主催） 医療である為、監督官庁が2ヶ所となる為か。
 - ② “ （タイ国 DTEC 主催）
- がまず開かれ、それに列席しました。

(B) 10ヶ月カリキュラムの作成。最終的ツメ。

日本側派遣講師名(教授クラス8名)と講義内容は早々にタイ側オーガナイザーに送っており、幾多となく交信も行ったが、前期3ヶ月分のカリキュラムが出発前(2wks)に送られてきただけであった。そこで、残り7ヶ月分のを滞在中に共同作成するのも主要目標で、これは何とか2wks内で無事終了しました。

(C) Course 受講者(枠14名)に対する講義, 実技指導

タイ側 7名

その他 7名(中国1, ネパール1, バングラディシュ2, インドネシア1, パキスタン1, フィリピン1)

全員皮膚科の経験はあるが、専門医の称号はない。語学力、専門知識、年令その他にかなりバラツキが多い。それらを考慮しつつ、講義内容を上下レベルに揺らせ乍ら反応をみて、実情把握することが、オーガナイザーとしての使命の一つと考えて実行。この印象をタイ側と後続の日本側教授陣に伝達するつもりです。己見レベルはともかく、熱意は強いので、10ヶ月間でうまく教授していけば、かなりのレベルに達せられるとの印象強し。

(D) これからの問題点

- ① タイ側及び出席者を満足させつつ、押し切られず、如何に目標を達成していくか。
- ② Certification の作成。日・タイ共同のものを作成すること。
- ③ 合否の判定。口答、筆記試験問題をどのように作り、判定をどうするか。要あれば、再試験も行う。
- ④①実施場所である Dermatology Institute の senior の中で日本留学組を増していきたい。
現在は米国組3名、英国組3名、日本組1名(Dr. Pimonpang は東大医卒38才、卒後3ヶ月順天堂にJICA派遣で再教育を受けた)。

現在、要請1名あり、何とか実現(最低1年)できないものだろうか?

④出席者7名中3名が留学(日本)を希望している。

(※) JICA の研修受け入れ用の経費増が、人材育成教育の充実を目指す日本としては最重要課題の1つと考えられる。とにかく、他先進国に比べ Post Doctor Course (大卒以後の卒後教育) の枠が少なすぎる。

以上であります。

業 務 日 誌

月 日	曜 日	内 容
3. 25	日	<p>バンコク着</p> <p>① J I C A 川上氏及び Institute of Dermatology の事務長, ビ チェン氏の出迎えを受ける。</p> <p>② 上記2名以外にJ I C A 派遣専門家平田氏(多摩ライ研)がバンコ クには滞在しており,(6ヶ月の予定),彼も出迎えてくれた。</p> <p>③ 当方は小生と,日本皮膚科学会前理事長安田利顕教授(北里大)の 2名。Diploma Course Dermatology J I C A 派遣の講師枠 が8名となっているが,タイ側より開始直前に日本側に要請されてい た講義内容の分担拡大を頼まれ,それを最少限充足するには8名から 10名への増員が必要となった。日本側のプログラム・オーガナイザ ーとしては誠に困惑していたところ,学会の最長老である安田教授が, 貴君ら若い学者が頑張っているのだし,国の為でもあるから,私が自 費参加して助けてやろうといわれ,この問題は解決した。あと1人分 については恐らく私が最終課程で口答試問試験を行う際自費でいくこ とになるろう。</p> <p>④ 簡単な業務連絡をすませ,J I C A 川上氏にホテル迄つき合っ て貰い別れる。①講義以外の公式日程は着後でなく,もう少し早く出発前 に知らせてくれると良い。④ホテルについての情報も伝ってない。</p>
3. 26	月	<p>Institute of Dermatology にて,Ministry of Public Hea- lth (厚生省)主催で。</p> <p>① Institute of Dermatology (国立皮膚病研究所)開設12周 年記念式</p> <p>② Diploma Course of Dermatology (10ヶ月コース,日・タ イ協力事業)の発足式を兼ねて行った。</p> <p><タイ側主要出席者> 厚生大臣, Mr. Marut Bunnag 厚生省医務局長, Mr. Komol 国立皮膚病研究所長, Dr. Renoo</p> <p><日本側出席者> J I C A, 河西所長 Diploma Course 日本側オーガナイザーの私 前記 安田教授(前日本皮膚科学会理事長)</p>

月 日	曜 日	内 容
3. 27	火	<p>(式次第と印象)</p> <p>① 国立皮膚病研究所開設以来12年間(タイでは仏式と12というエトの1めぐり, の数字は1つの区切り)の歩みと新しくこの皮膚病研究所を母体として本年より発足する日・タイ協同事業としての "Diploma Course of Dermatology" のことについて簡単な報告があった。</p> <p>列席者は約70名(タイ厚生省関係が主)報告する人は, Kamol 医務局長, 報告を受ける人は厚生大臣, その他の列席者はこれを聞いているという形である。</p> <p>② 国立皮膚病研究所の発足と発展に寄与した人の表彰式へと移る。約40人位の人が金属製の楯を貰ったが, "頑張ってくれてありがとう" というようなことを書いてある。発行者は皮膚病研究所長レヌー氏。</p> <p>日本側からはこの楯を貰った人は伊藤賀裕元岐阜大教授(欠席)(研究所設立の時のアドバイザー), と私。嬉しいというより, バカにされたような気分である。というのは, タイ側は私が以前教えたレジデント(卒後2~3年生)迄ほぼ全員この研究所で働いている人がもらっているからである。厚生大臣とか王様名でくれるなら, とにかく。</p> <p>③ これ迄この皮膚病研究所が行ってきた3ヶ月教育コースには講師派遣(私を3回)したり, 機材供与したりしてきたし, 新たに始まる10ヶ月教育コースには専門家8名派遣することになるし, 経費も半分以上補助する訳だが, 来賓のスピーチとしてJICA所長,(行政側), 私(学術側)位でも加えられないとは, 一寸現地のJICAの下交渉が良くないのではないか??</p> <p>態々大学を休んでくる必要もないような会であった。</p> <p>DTEC主催で, Diploma Course of Dermatology 発足記念式典 主要出席者</p> <p>タイ側 Mr. Apilas Osatananda. (Director General) Miss. Preya (局次長) Dr. Renoo (国立皮膚病研究所長) その他</p> <p>日本側 渡辺公使, JICA河西所長, 私, 安田教授 その他 Diploma Course 出席者, タイ側7人</p>

月 日	曜 日	内 容
		<p>バングラ2人, ネパール1人, パキスタン1人, 中国1人, フィリピン1人, インドネシア1人, 以上14人。</p> <p>(式次第と印象)</p> <p>タイ側2人と日本側2人(渡辺公使とJICA所長)の演説を拝聴し, コーヒーが出て終り。演説内容は仲々良かった。</p> <p>しかし, 私は最近次第にこのJICA-DTEC協力事業の技術協力運営方式に疑問と不満をもっている。なるほど, 資金を出し, 業務運営を行うのは行政側である。しかし, 10ヶ月の長きに亘り教育(講義と実技指導)を行っていくのは学術側(専門家)のはずである。10ヶ月は実質的には1年で, これは大学院大学構想のはずである。それも, 将来何年間に亘って続くのである。大変な数の手紙, 電話のやりとりをして, カリキュラムを作り, 実際に運営し, そしてこのコースの成否は教育内容まさにそこにかかってくるのである。タイ側のカリキュラム・オーガナイザーのRenoo氏と私は大学教授と医学部長とカリキュラム委員長と学生部長を兼任しているようなものである。私はロンドンとアメリカで行なわれている皮膚科専門医コース(10ヶ月コース)の講師もしたが, このように教授陣のClassificationの低い運営は正に驚きとしか言えない。学術側として安田教授と私の教育方針に関する見解演説位入れておいた方がよいのではないか。切角やってきたのだから, 現地の日本側も先方に高く売ることを考えた方が賢明と思われるが??</p> <p>午後, Dr. ピモンパン(東大医卒)を病院に見舞う。</p>
3. 28	水	<p>安田教授講義: 化粧品皮膚障害について 2 hrs</p> <p>私の講義: 皮膚の構造と機能 4 hrs</p> <p>昼, Dr. Renooと, 夜, Dr. 平田送別会出席。タイのライ研究者と親交。</p>
3. 29	木	<p>安田教授講義: 化粧品皮膚障害について 2 hrs</p> <p>私: 皮膚の機能とくに表皮細胞について 4 hrs</p> <p>昼食: DTEC局長 Apilasに招かれ, 局次長, 安田教授, 私の4人でとる。2人共とても良い人でこのコース開設迄の労と, これからよろしくということと, 問題点などを聞かれる。</p> <p>夕刻, 局次長と夕食。局長からとのことでオーキット後花多数もらう。</p>
3. 30	金	<p>安田教授: 老人性皮膚疾患について 2 hrs</p>

月	日	曜	日	内	容
				私：ケラチノサイトの機能と機能異常としての角化異常症 昼，Dr. Renooと。夜，皮膚病研究所主要スタッフと会食。	4 hrs
3.	31	土			
4.	1	日			
4.	2	月		安田教授：老人性皮膚疾患 2 hrs 私：表皮細胞と微生物との闘い 4 hrs 昼，Dr. Preyaらと。夜，Dr. Pimongpanの夫君と。 夕刻，熱帯皮膚病研究所表敬訪問（Dr. Nut 所長と歓談）	
4.	3	火		安田教授：小児皮膚の特異性と疾患 2 hrs 私：自己免疫性水疱性疾患の臨床と病態生化 3 hrs 昼，Dr. Renooと。夜，Dr. Thadaと。	
4.	4	水		安田教授：小児皮膚疾患 2 hrs 私：先天性水疱症の病態 JICAに私が出向き報告。（昼）所長不在。夜Dr. Renooと会食。	
4.	5	木		安田教授帰国。少しお疲れのようで気になる。切角来て戴いたのにと大変気になる。 私：皮膚科学最近のトピックス，“癌，自己免疫病解決を目指して” 7 hrs 昼，Dr. Renooと会食。夕，大使公邸で夕食を御馳走になる。 （講義印象） 学生は消極的，卒後2年～20年と多様。スライドを急ぎよ少なくして顔を見ながら内容を動かしていく。易しい質問を發し，答えさせながら盛り上げていく。中国の人とタイ2人の英語力悪い。これらが落ちこぼれないよう注意する。Dr. Renoo始めタイ側にも印象を伝える。日本側教授陣にも伝達事項多そうなのでイヤになる。しかし何とか2 wksで自信は学生につきつつあり，最後に彼らの私に達する評価表をみる。90点位か。	
4.	6	金		学生と休日1日語り合う。日本に留学したい人多いのに驚く。	
4.	7	土		帰国，卒業試験をしに又，こななければならない。	

国名 タイ
指導科目 水痘ワクチン
派遣先機関 ウイルス研究所
専門家名 高橋理明
赴任時現職 大阪大学微生物病研究所教授
派遣期間 1983. 9. 1 ~ 9. 14

業務報告書

1. 講演

(1) Virus Research Institute, Department of Medical Sciences, Ministry of Public Health にて水痘ワクチンに関する講演を約1時間行った。

出席者は所長以下研究者約15名。

理解度はかなり高く、講演後活発な討論が約30分行なわれた。

(2) Siriraj Hospital Mahidol University に於て、水痘ワクチンに関する約1時間半行った。出席者は約40名。小児科の教授及びスタッフ、微生物教室のスタッフが主であった。formalな講演であったので質問等は小児科教授1人のみであったが、終了後は個人的に多くの質問、討論をうけた。

何れも水痘ウイルス及びワクチン研究の概要を説明し、聴衆に多大の感銘を与えた。

2. 携行機材

今回携行した機材 (microplate, tuberculin syringe, 蛍光抗体, ヒト培養細胞, 水痘皮内抗原) は Virus Research Institute 及び Siriraj Hospital に於て水痘ワクチンに関する免疫反応をしらべるために待望していたもので、非常に喜ばれた。滞在中実験指導を行って、実際に機材を使って血清検査が行いうるようにした。

これらは、今後は十分活用されて成果をあげられると思われる。

3. Siriraj Hospital の小児科のスタッフの水準はかなり高く、水痘ワクチンを用いての研究は今後の発展が期待できると思われた。ワクチン接種後の免疫検査については、微生物教室及び Virus Research Institute のスタッフとも従来水痘ウイルスについての経験がなく、戸迷いがあったが、今回の訪門により、実質的な指導及び器材供与を行ったので、今後は十分こなしていけるものと思う。

4. 所感

私共の研究室で開発した水痘ワクチンの試験接種が行なわれてきたのはわが国及び米国、

ヨーロッパのいわゆる先進国のみであり、発展途上国ではタイ国が最初であり、今回の訪門により、その並々ならぬ熱意が感じられたがそれだけ小児科関係者ではこのワクチンに対する要望度が大きいといえる。

今回の訪門において、多くのタイ医療関係者と会談の機会をもつことができた。タイ国一般の水準はまだ低いが、上層部のスタッフは欧米留学の経験をもつものも多く、その知識、見識はかなり高度であり、できるだけ先進的なものを取り入れたいという意欲は強い。

彼らはアジアのリーダーとしての日本からの援助を強く期待しており、それにできるだけこたえることはわが国としては財政的な負担は大きい、国際協力という見地からはやむをえないことと思われる。しかしその際、わが国から派遣されるエキスパートは先方の人々と human relationship を確立できる人格のすぐれた人であることが重要である。人物を見る目はどの国に於ても同じであり、この点は国際協力において特に留意すべきことと感じた。

業 務 日 誌

月 日	曜 日	内 容
9. 2	金	Dr. Chuirudee Jayavasut と打合せ。 Shiriraj Hospital に Dr. Sombodhi Bukkavesa, (Chief of Infections Disease Division, Professor of Pediatrics) を訪問 水痘ワクチンの Clinical trial の結果について討論。 Dr. Sombodhi, Dr. Prason Tuchinda (Chairman, Dept of Pediatrics), Dr. Chuindudee と昼食。 午後, International Symposium on Immunology for the developing tropics (Hyatt Central Plaza) に出席し, "Immune response after varicella vaccination in immunocompromized children" に comment を求められた。 夕, Dr. Sombodhi, Dr. Nadirat と水痘ワクチン接種について会議。
9. 5	月	Virus Research Institute を訪門。 Director Dr. Kanai と打合せ。 持参の human cell を用いての実験指導を行った。
9. 6	火	Virus Research Institute にて Lecture on Varicella vaccine AM 9:45 ~ 11:00

月	日	曜日	内 容
			Dr. Kanai らと水痘ワクチンに関する討論。 午後, Shiray Hospital にて Lecture on Varicella Vaccine PM 1:45 ~ 3:15
9.	7	水	Virus Research Institute に於て水痘ウイルスに関する実験指導
9.	8	木	Virus Research Institute に於て水痘ウイルスに関する実験指導
9.	9	金	Siriraj Hospital, Mahidol University に於て Dr. Sombodhi Bukkavesa, Dr. Nadirat, Dr. Chantapong らと水痘ワクチンのこ れまでの接種成績の検討, 今後の研究計画について打合せて行った。
9.	10	土	Dr. Nadirat と共に Chantaburi を訪門, 保健向上計画の概略をきく。
9.	12	月	Virus Research Institute に於て水痘ウイルスに関する実験指導。
9.	13	火	Dr. Kanai, Dr. Chinusudee と水痘抗体価測定法について会議。

国名 タイ
指導科目 栄養学
派遣先機関 第4回アジア栄養学会
専門家名 大磯敏雄
赴任時現職 (財)日本国際医療団常務理事
派遣期間 1983 10. 30 ~ 11. 6

業 務 報 告 書

アジア地域全般に渡っては、或る程度共通な食生活や栄養状態があるので、The Asian Congress of Nutrition の第1回を1971年にIndia, のHyderabadで行い、これに続いて第2回はManila, Philippinesで、第3回はJakarta, Indonesiaで、そして今回第4回のCongressがBangkok, Thailandで行われた。

今回の会議には凡そ1000名の出席者があり、国外よりの参加者は凡そ400名、国内600名と称されている。この国外出席者中日本よりの出席者は76名であった。日本人研究者は、夫々の分野にCo-chairpersonやSpeakerとして出場していた。

私はこの会議は第1回から関係しており、日本代表として努めて来た。然し、第5回を日本招へいが予定されているので、私は今回を最後に若い人に代表の席を譲って、後継者を紹介する役割があったのと、アジアの国々の栄養状態を発表し合うWorkshopのChairmanを演ずるため出席した。

従って、次回(1987)を日本が受持つため、この会議の総会において加盟国代表との話し合いを行い、次回を引受けることが決った時点において11月4日昼食会を開催して、凡そ40名の加盟国代表者らを呼んで懇談を行った。

私の行ったWorkshop 4は、題として"Report of Current Nutrition Activities in Asia"であって、このWorkshopの指導なるテーマとして"The Need for Nutrition Activities in a Comprehensive Program"と題するLeading Addressを行った。これは各国夫々異なる食生活や伝統があり、食物の生産や経済活動、人種的な特性などあって、Nutrition Activitiesと夫々立場を異にし、大変複雑な様相を示しており、それぞれの立場から最良と思われる栄養改善運動を行う可きである。だが、共通なことは、如何にしてこの困難な大事な仕事を行うにしても、やる気がなくてはならぬ。このやる気を起させることは、只精神的な努力では駄目で先ず、Undernutritionを克服しなければ生産性は向上しない。だが国民がhungerの状態では、このやる気の起らぬことは曾ての日本の最悪な食糧事情のときに見られたことと同様であった。最少の食物を獲得することが出来、最低のhungerから立上らねばこのやる気が起るといふことにならない。精神作興や技術援助の前に先ず或る程度の食物を得て体力をつけ、その上やる気を起させるということが一般共通の大切な行動であること

を先ず自覚してほしいと強調した。

今後ともAsian Congress of Nutritionはアジアにおいては、それぞれ特別の研究課題を大きく取扱うべきであり、従来の欧米もほうから脱却して、アジアに適した栄養改善活動を如何に早く見出して、アジアの国々を発展途上中から解放して、良き生活を享けさせるよう今後も大いに努力する必要がある。1987年の第5回Congressが日本で開かれるのを機に、アジアに栄光をもたらすものにしなければならない。

そもそもその発足当初は政府に依頼せず、民間の活動として行って来たのであるが、何れの国もその国政府が非常に力を入れている。日本もこの点では官民一体となってこの会議の前途を考える可きを痛感した。

業 務 日 誌

月 日	曜 日	内 容
10. 30	日	東京発にてThailandのBankokへ到着。 会場のThe Ambassador Hotelに赴き、今回のIV Asian Congress of Nutritionの事務当局と会談し準備の支援を行う。
10. 31	月	Congressの受付が開設され、登録を行い、Proceedingsの送料(U. S \$ 5. 00)をおさめ、前回(第3回) Jakartaで行われた第3回 CongressのProceedings(定価U. S \$ 20.00)を購入する。
11. 1	火	10:00 Opening Ceremonyが行われるので9:30には会場に着席。 Her Royal Highness Princess Maha Chakri Sirindhornの入場を待ち、Ceremonyが始った。 先ずPresident Dr. Aree Valqaseviの挨拶の後、HRH Princessの開会宣言のお言葉があった。 このCeremony終了後、各国代表のみ別室に招じ入れられ、HRH Princessと同席しながらコーヒーを頂き、1人1人に言葉をかけられた。同Princessはつい先達て、2週間日本を旅行された由にて、日本の栄養改善の成果を賞讃され、日本については大変好意ある御発言がなされた。私は日本代表として、Princessに種々言上した。 Coffee Breakをはさんで、前大蔵大臣をつとめたMr. Boonchu RojanastienがKeynote Addressとして"Poverty, Malnutrition and National Development"のスピーチが為された。

月	日	曜日	内 容
			引続き Program による予定通りの進行がなされた。 夜は Reception があり、私はそのあとを利用して幹部役員との打合せ、懇談を行った。
11.	2	水	学会の方は Program の順による進行が行われ、昼までの時間を利用して、Lotus Room in Asian Congress を支える FANS (Federation of Asian Nutrition Societies) 加盟国代表が集って General Assembly が行われ、ここで FANS 事務局が Indonesia から Thai に移り、次回第 5 回 Congress は日本でやることに満場一致で可決。日本もこれを accept した。
11.	3	木	米国の Dr. N. S. Scrimshaw による国連大学、及び国際機関の栄養改善活動に対する役割について講演があり、引続き一般発言と討論が行われた。 この日の夕には宴会が行われ、日本側は次期受諾のこともあって、殆んど主賓扱いをうけた。
11.	4	金	FANS の Activities の歴史的な紹介や活動ぶりが公開され、各分科会や Poster Session が行われ、午後には、私の主催する Workshop "Report of Current Nutrition Activities in Asia" を行い、これの終了と共にこの Congress は終わった。
11.	5	土	この機会に集った IUNS (International Union of Nutritional Sciences) の各委員会、FANS 加盟代表会議などあり、夜行 (JL 718) にて帰京の途につく。
11.	6	日	6:30 a. m. 無事日本に帰着した。

国名 タイ
指導科目 医学図書館情報学
派遣先機関 第11回SEAMICワークショップ
専門家名 津田良成
赴任時現職 慶応義塾大学文学部(図書館・情報学科)教授
派遣期間 1984. 2. 4 ~ 2. 11

業務報告書

I タイのバンコクで昭和59年2月6日~10日の5日間開催された第11回SEAMIC(東南アジア医療情報センター)の医学文献情報のためのワークショップに相談役として出席。

この会議は、従来SEAMIC東京事務局が一方的に援助を提供していた医学文献の複写コピー提供サービス及びその他の文献情報サービスを、出来る限りSEAMIC参加国(インドネシア、マレーシア、フィリピン、シンガポール、タイ)同志で助け合うようにするためのネットワーク形成に関する合意を作り上げることと、そのための種々のステップについての討議をすることが目的。

出席者は、各国からそれぞれの国の主要医学図書館の館長、および、保健省の医療情報関係医師など各2名、日本側から国際協力事業団による派遣者として植松教授と津田、その他SEAMIC東京事務所から日本側会議参加者2名、SEAMIC事務局長、事務局2名、WHOから西太平洋地区のオフィス員1名、それに加えてタイ側のオブザーバー約10名。

会議の結果：出席者全員SEAMIC参加国相互を結ぶネットワーク形成に賛同。そのための取るべき手段として：

① 各国の主要医学図書館は、その所蔵する医学雑誌の誌名と、その所蔵巻号をSEAMIC・東京に通告、SEAMIC・東京はコンピュータを使用してこれをリスト化し、出版物の形で各国に配布。

各国の医学図書館はその情報に基き、自館は所蔵していないが、相手図書館の所蔵している雑誌の論文を、必要に応じて複写コピーの形で送って貰うシステムを形成する。

② その相互の複写コピーのやり取りでの複写料金や送料などの処理を日本側で負担する作業を軽減するために、クーポン・システムの導入を検討する。

③ 複写活動を確保するために、日本側はSEAMIC参加国の主要医学図書館に複写機を寄附する。

④ 各国で発表される医学研究論文を検索するための手段となる索引誌SEAMIC Index Medicus をスケジュールに従って編集・出版する。

などの事項が決定され、SEAMIC・東京に対する勧告の中に折り込まれた。その他に、いわゆるgray literature などと呼ばれる各国関係官庁で作成される医療情報関係報告

書や、学位論文、会議議事録など、通常の出版物配布のルートに乗らない資料類の共同リストの作成が提案されたが、報告書入手のむずかしさから、学位論文と議事録のみを対象とした共同リストが作成されることに決定した。

又、SEAMIC各国の医学図書館及びその活動状況を知るための統計作成の共同作業を行うことが決定。

なお、SEAMIC諸サービスの各国の個々の医師による利用実態と、それらのサービスに対する医師の態度を知るための利用者実態調査は、実行するに時期が未だ早すぎるとの意見がとおり、先ず医学図書館員に対するSEAMIC諸サービスの利用調査から始めることに決定。

これらの議題のまとめは、SEAMIC・東京に対する勧告と併せて整理された。

その他にも、医学図書館員の教育・訓練に関するパネル討議が行われ、その結果：①医学文献の索引作業、②医学文献のコンピュータ検索、③コンピュータの医学・医療情報への適用、の3項目に関する研修コースの開催を日本側が検討することの要望が日本を除くSEAMIC参加国出席者全員一致で提出された。

II 携行機材

今回のワークショップには、医療情報活動の先進国としての米国での医学図書館活動の紹介に役立てるためと、医学図書館の扱う資料の中で近年急速にその重要性を増してきたニューメディアの扱いを実地に見せるために、ビデオ・デッキ一式とビデオ・テープ2本を携行した。

これらのテープは、会議中、フィールド・トリップの1日のみを除いて、毎日昼の時間に映写された。その結果、特にタイの医学図書館長から、それらの機材を保健省に寄贈せず、自分達の図書館に直接寄贈してくれないかとの要求が出されたほど大きな反応があった。

III タイ、その他のSEAMIC関係国の医学文献情報活動の水準

- ① ひと握りの人数ではあるが、SEAMIC関係国の医学図書館のリーダー達は、米、英、カナダ、オーストラリアなどの先進国の大学院で図書館学の専門教育を受けているため、従来の伝統的図書館学（コンピュータ以前の）に関しては、屢々日本の図書館員より高い図書館学の知識を持っている。
- ② 従って、コンピュータ利用などの先端技術を除くと、これらの国々の医学図書館の中には、日本の医学図書館を凌ぐレベルのサービスを提供しているところがある。特にシンガポール、マレーシアで顕著。しかし資料の収集、蓄積においては著しい遅れがみられる。殊にインドネシアでの状況は非常に悪く、今後益々その面での援助を必要とするであろう。

IV 所感

文献情報は、医学・医療の進歩にとっては、市民生活における上下水道のように、根本的なものであるが、その地味な性格のため、先進国以外では直接その恩恵に浴している筈の医療従事者達にすら十分には理解されていない。

そのため、SEAMICが現在の段階まで文献情報のネットワーク活動を進めてくるのに、10年以上の年月を費している。

しかし、最近やっとそれまでの苦労の実が結ばれてきだし、SEAMIC各国の医学図書館員達も非常に協力的になってきだし、SEAMIC地域での医学雑誌文献の索引であるとか、図書館所蔵資料の共動目録であるとか、図書館統計その他のリストの共同作成が可能になってきた。

ところが、世界保健機構（WHO）は、東南アジア地域でも、西太平洋地域でも、約3年程前から急に、医学文献情報のネットワーク形成に熱心になりだし、SEAMICの敷いた路線なども利用して、その活動を拡げようとしている。

日本としては、今迄の苦労を無駄にしないためにも、今ここで本腰を入れて、東南アジア、その他の地域における医学文献情報のネットワーク化に努力を払うべきであろう。

国際協力事業団のこの面での効果的活動としては、後進各国の主要医学図書館に対するビデオ、マイクロ・コンピュータ、ワード・プロセッサ、複写機などの機材の寄附、図書・雑誌などの資料の寄贈などの物的援助の他に、SEAMICなどの既に活躍している組織の網目を利用して、医学文献の索引作業、コンピュータによる文献検索、医学・医療の情報活動におけるコンピュータの利用などの題目についての東南アジア諸国の医学図書館員や医療情報活動に従事する医師その他の医療従事者などを対象とする2週間から4週間位の研修コースを設けて、それらの人達が変化する新しい時代の要求に応えられるようにするチャンスを与えることなどがあろう。

いづれにしても今回のワークショップは短時間のうちに多くのことを決めることが出来たばかり、SEAMIC各国の医学図書館員に積極的に医学文献情報活動のネットワーク作成という大仕事に参加する意欲を与えたことからだけでも大成功であったと言えよう。

業 務 日 誌

月	日	曜 日	内 容
2.	4	土	植松教授他SEAMIC（東南アジア医療情報センター）側の4名と共に、朝10時45分成田発のタイ航空TG 609便でバンコクに向う。バンコク夕方到着。タイ保健省の国際課の人達の出迎えを受く。 宿舎フィアット・セントラル・プラザ・ホテルで夕食時に日本側の打合

月	日	曜日	内 容
2.	5	日	<p>せ会議開催。</p> <p>午後1時間半程、タイ側のSEAMIC国内委員会のメンバーと日本側とで打合せ会議開催。会場の下見、携行機材の点検を行う。</p>
2.	6	月	<p>9月より、第11回SEAMICワークショップを開催。開会式で保健次官Nondusta博士の開会の辞のあと、開会式出席の間に合わなかったSEAMIC事務局長の日本国際医療団大田専務の挨拶を津田が代読。</p> <p>午前中の事務打合せの時間を利用して、植松教授と津田と、日本側SEAMIC事務局員1名とで、国際協力事業団バンコク事務所及び日本大使館を表敬訪問、河西JICAバンコク事務所長及び佐藤一等書記官に面会、今回のバンコクでの仕事の概略を説明。</p> <p>昼の時間に、会議室で携行したビデオデッキの取扱いのデモンストレーション及び2本のテープ映写を行った。なお、会議期間中毎日食事時にビデオの映写を行うことに決定</p> <p>午後、各国からCountry reports が報告された。</p> <p>夕刻、同ホテルで開かれたタイ側の紹待パーティに出席。</p>
2.	7	火	<p>朝8時、朝食時に、日本側の打合せを再度行った。</p> <p>9時より、ワークショップの議題に入り、午前中、第1議題の総合目録の作成。第2議題の相互貸借システムの構築の可能性が論ぜられた。</p> <p>昼食時、ビデオテープ映写。</p> <p>午後第3議題のgray literatureの収集問題が論ぜられ、植松教授がモダレーターを務めた。</p>
2.	8	水	<p>午前、医学図書館員の教育に関するパネル討議を行ない、津田がパネルメンバーの1人として日本の状況を紹介し、続いて質疑応答に参加。</p> <p>昼、ビデオ映写。</p> <p>午後第4議題として、SEAMICメンバー国の図書館の統計作成、およびそれらの国々の医学図書館利用者のSEAMICサービスの利用調査施行について議論が行なわれた。</p> <p>その後、ワークショップのまとめ、勧告作成の下準備が行なわれた。</p>
2.	9	木	<p>フィールドトリップが行なわれ、タイ国科学技術研究センター、アジア工科大学図書館及び同大学コンピュータ・センターなどの見学が実施された。</p> <p>夕方、保健省次官によるワークショップ参加全員の紹待晩餐会が行なわ</p>

月 日	曜日	内 容
2. 10	金	<p>れた。</p> <p>9時から12時まで、会議のまとめ、勧告の承認、及び閉会式、閉会式にSEAMIC大田事務局長からタイ保健省に対して、津田らが国際協力事業団の携行機材として持ち込んだビデオ・デッキ式及びテープ2本の贈呈式が行なわれた。</p>
2. 11	土	<p>保健省の国際課職員の見送りを受けて、12時頃バンコク空港から日本航空のJAL 466便で帰国。</p>

国名 タイ
指導科目 公衆衛生
派遣先機関 第11回SEAMICワークショップ
専門家名 植松 稔
赴任時現職 相模女子大学学芸学部教授
派遣期間 1984. 2. 4 ~ 2. 11

業 務 報 告 書

2月7日(火)ワークショップ第2日午後、未発表資料(gray information)の収集整理方法の議事のもグリーダーとなる。日本を含むSEAMIC各国における1983年以降の医学領域学位論文(題目及び著者)及び学会会報の目録を編集することが参加者から提案され、採択された。

2月8日(水)ワークショップ第3日午後、SEAMIC各国の医学図書館及び司書に関する統計調査等について討議が行われた。この時、SEAMIC保健統計部会の事業について次のように述べた。SEAMIC保健統計部会では日本を含むSEAMIC6カ国の保健統計を収集、SEAMIC Health Statistics として毎年編集刊行している。現在1982年版を改訂して年度内に1983年版を刊行すべく作業中である。各国に保健統計のカウンター・パートを委嘱している。SEAMIC Health Statistics は各国の保健統計カウンター・パートとの共同作業によって内容を充実・改善してゆきたい。SEAMIC Health Statistics の内容・配列・体裁等についての意見を寄せられたい。市販されている各国の保健統計報告は東京で購入するので、最新の資料に関する情報を提供されたい。市販されていない各国の保健統計資料についても、差支えない範囲で提供して頂きたい。本日討議されているSEAMIC各国の医学図書館及び司書に関する統計調査の結果は、“SEAMIC Health Statistics 1983”には間に合わないけれども、その次の版には是非収録したい。Dr. Chalermsook Boontay (タイのカウンター・パート)からSEAMIC Health Statistics の改訂にはカウンター・パートとして大いに協力したい、と、賛意を表わしてくれた。

本統計書に収録されている統計によれば、人口に対する医師数は日本の約1/10、SEAMIC 諸国の中でインドネシアに次ぐ低率である。医師によって死亡診断が行われる割合は死亡数の1/4程度らしい。1978年、死亡数233,216の27%、63,464が症状及び診断名不明確の疾患で占められている。この数は、これを除く死因の主位を占める“不慮の事故、中毒、暴力”による死亡数27,313をはるかに上回る。

医師以外の諸保健職種の人達の活動が大いに期待される所以である。

チャンタブリ県の地域保健活動向上計画プロジェクト実施に際してモデル地区内に贈与した自転車は、今もヘルスワーカーらが活用している由である。

この3月をもって終了するこのプロジェクトの成果には深い関心を抱く次第である。

2月9日(木) ワークショップ第4日の視察及び観光。

午前に視察したタイ国立文献情報センター(Thai National Documentation Center, TDC)は、わが国における農業試験場等の国立の各試験研究機関及び消費生活センターの機能を有する施設のように思われる。

上記を視察した後、アジア科学技術研究所(Asian Institute of Technology, AIT)を視察した。本施設はバンコック北方42 Kmに位置し、施設内の図書館は日本国政府が寄贈したものである。

午後は民芸品授産所(SUPPORT Foundation, handicraft training center)を視察した。タイ王室恩賜財団が農村振興を目的として設立。農民に民芸品製作技術を指導、製品を販売している。

さらに、バンコック北方60 Kmのバン・パイン離宮を見学。ラマ5世が湖上に建てた夏の離宮。北京の故宮を思わせる中国風の宮殿である。他の観光客は階上には入れなかったけれども、案内した保健省の職員が特別に依頼したためか、階上にも登らせて貰う。階上の寝室に隣合せの書斎の文庫には江戸時代のもと思われる日本語解説付の日本諸国地誌が保管されていて、手にとって見ることもできる。歴史学者には貴重な古文書ではなかろうか、と思われる。かりに同じ古文書が日本の国内では珍しいものではないとしても、これが、タイのバン・パイン離宮に保存されている事実は興味深い。

バンコック国際空港到着時にも同空港出発時にもタイ国保健省国際課の女子職員2名が懇切丁寧な面倒を見てくれた。ワークショップも滞りなく行われた。

タイ国の誠意に感謝し、同国の医療・公衆衛生の今後の進展・向上を期待して止まない。

業 務 日 誌

月	日	曜 日	内 容
2.	4	土	10:45東京国際空港発TG-604便、台北経由17:45バンコック国際空港着。
2.	5	日	午後第11回SEAMICワークショップ組織委員との打合せ。
2.	6	月	第11回SEAMICワークショップ第1日 開会式後、午前中、在タイ国日本国大使館およびJICAバンコック事務所を表敬訪問。伍島忠春一等書記官、河西明事務所長及び能代副所長からタイ国に対する保健医療協力事業の現状について説明を受ける。
2.	7	火	第11回SEAMICワークショップ第2日

月 日	曜 日	内 容
2. 8	水	<p>午後、未発表資料の収集整理方法の議事のモデレーターとなる。</p> <p>第11回SEAMICワークショップ第3日</p> <p>午前：医療保健文献情報関係司書の教育訓練計画についてパネル・ディスカッション。続いてSEAMIC Index Medicus and Databaseについて討議。</p> <p>午後：SEAMIC各国の医学図書館及び司書に関する統計調査について討議。</p> <p>夕刻、SEAMICがタイ国内のSEAMIC関係者を晚餐に招待して懇談。</p>
2. 9	木	<p>第11回SEAMICワークショップ第4日：ワークショップ参加者一同バスで下記施設の視察及び観光。</p> <p>午前：タイ国立文献情報センター（TDC）及びアジア科学技術研究所（AIT）を視察。</p> <p>午後：民芸品授産所（SUPPORT Foundation）を視察した後、バン・パイン離宮を見学。</p> <p>夕刻、参加者全員、タイ国保健省招待の送別映餐会においてタイ古典舞踊を觀賞。</p>
2. 10	金	<p>第11回SEAMICワークショップ第5日：報告書案及び勧告書案について最終討議。閉会式に先立ち、JICAからの携行機材「ビデオ・デッキ、カラー・テレビ各1個及びビデオ・カセット・テープ2本」を日本国際医療団太田新生専務理事よりタイ国保健省に贈呈。なお、この機器は会期中会場に設置し、昼休み時間等に随時供覧していた。</p> <p>閉会后、日本側が各国からの参加者及びタイ側の組織委員全員を午餐に招待。</p> <p>夕刻、参加者全員、国立マヒドン大学主任司書Miss Uthai の豪邸に招待を受ける。</p> <p>午後、JICAが国立マヒドン大学のサラヤ・キャンパス（バンコック西方4.0km）内に建設中のアセアン・プライマリ・ヘルスケア・訓練センター（ASEAN Training Center for Primary Health Care Development Project ATC/PHC）を視察。神奈川県足柄上保健所から昨夏8月長期専門家（公衆衛生）として着任した小林基弘職員に遭遇、長谷川謙JICAコロンボ計画専門家に紹介される。</p>
2. 11	土	<p>JAL-466便に搭乗、11:45バンコック国際空港発、19:45東京国際空港着。</p>

II 中近東・アフリカ

スーダン

トルコ

国名 スーダン
指導科目 内科学
派遣先機関 ハルツーム大学医学部
専門家名 太田善介
赴任時現職 岡山大学医学部第三内科教授
派遣期間 1983. 11. 3 ~ 11. 17

業務報告書

1. 講演・技術指導について

日誌の如く教育講演を行い、患者を廻診し、討論し指導した。
知識の摂取には熱心と思われた。

2. 携行機材について

携行機材を税関より受取ることが出来なかったのは残念であり、本来の趣旨が損われた。

3. 受入国の医療・医学の水準について

医学の就学年数等は日本とあまり変らぬようであるが、医学の講義はすべて英語で行われている。図書館の文献、書籍はイギリスのものが多く、又大学教官はイギリスに留学している者が多い様であった。医療については建物は古く、設備は悪く、医療機器は古く、使える機器は酷使され、すべて援助によるものであるから、同一目的の機械・器具も、製産国、種類がまちまちで、部品のアフターサービスがないからこわれたまま。医薬品はすべて海外援助に依存している。市内の薬局で抗生物質が入手出来、比較的安いとのこと、これは援助の薬を政府が民間へ売り付けるためという。とにかく有形・無形いずれも欠乏する中を何とか医療を行っているという印象で、その日暮らしの医療とでもいうべき状態である。しかもこのような医療の恩恵をこうむるのは首都ハルツームの一部の患者のみで、スーダンの大部分は未だシャマニズムと祈禱師の活躍する舞台である。

4. その他の所感・提言

前回タンザニアに出張し、今回が2度目のアフリカ技術協力のための出張なので、税関などにみられた若干のトラブルや非能率な業務、やる気のなさ、各国援助競争を手玉にする態度などは今日のアフリカ病と理解し批判してもはじまらない。

今度ハルツーム大学における内科部門の指導及び研究をスーダン側に要請された理由は建設中の日本の援助による高級トレーニングホスピタルに関連しての人事交流の一環ということになる。スーダン人の病院長ならびに数人の医師はすでに決っていると聞いている。又予定されている設備内容も現在のスーダンの医療をはるかに抜いている。これらを踏まえてこの病院の将来について以下の提言をしたい。

(1) 病院の運営に日本側の意見も反映させる必要がある。無条件にこの病院を開くと患者が

殺倒し高級訓練病院としての意義がなくなり、又高級医療機器の乱用は、彼等の使用上の不慣れもあって早い破損につながる。

医療機器を整備して、高度の診断技術を維持し、選別された患者のみの診断治療を行うのがよい。こうすれば援助効果も大きい。

- (2) 日本はそのための物品の補充を年度毎行う。
- (3) 医療技術の向上はスーダン人を日本へ迎えて訓練を行うことを主とする。
- (4) 日本びいきにするためには日本へ呼ぶのが最もよい。ただし人選とスーダン人の頭脳流出に対する処置はよく考えておく必要がある。

業 務 日 誌

月	日	曜 日	内 容
11.	3	木	22時30分成田発JL421便でロンドンへ向け出発。
11.	4	金	ロンドンが濃霧のため着陸できず、パリ・ドゴール空港で数時間待機後ヒュースロー空港に無事着陸。 15時15分ロンドン発のBA153便にやっと乗り継ぎが出来る。後で判ったことであるが、携行した荷物は間に合わなかった。
11.	5	土	1時30分ハルツーム空港に着く。日本大使館の山口氏、ハルツーム大学医学部のムフタル医学部長代行の出迎えを受ける。この時携行した荷物がBA153便の出発に間に合わなかったことを知る。やっと4時にヒルトンホテルに入る。この日はベッドの無い部屋だったので長いすにごろ寝。 9時大使館の車で大使を表敬訪問するも大使は所要ありとのことで面会出来ず（その後帰国まで面会出来ず）、次でハルツーム大学医学部にムフタル医学部長代行（内科学教授）を表敬訪問し、今朝の出迎えを謝す。ここで以後の行動のスケジュールを決める。
11.	6	日	9時に大学より出迎えの車が来る。驚いたことにおんぼろの小型バスである。大学所有の車はこれ1台か、以後帰国するまでこの車に乗せられる。行ったのはハルツーム市内より10数Km離れたSoba病院、大学医学部はハルツーム市内にあり、学生の訓練には道1本へだてたハルツーム病院（厚生省所属、約1000床）を利用している。Soba病院は医学部の唯一の附属病院であり、ソ連の援助による結核病院としてスタートしたために郊外にあり、後増築して現在約350床、内科、外科、婦

月 日	曜 日	内 容
11. 7	月	<p>人科等あり，内科部門を視察する。入院室は数人部屋である。熱帯なのに冷房・扇風機なし，ベッドと粗末な物入れのみ，人工腎臓室には透析器が1台のみ，透析液はスイス製，ブドウ糖液はイタリー製，内服剤も含めて薬剤はすべて輸入品，従って治療費は高価につく。</p> <p>Soba 病院の症例検討会へ早朝より出席。ギラン・バレー症候群，髪染め薬による中毒症（急性腎不全），半身不随と化膿性脳膜炎などの患者について討論する。当地の女性は手足の指先きなどを黒く染める風習があり，これに一部髪染めが用いられる。この髪染めが自・他殺に用いられることがよくあるらしい。病室内を廻診して患者をみる。レプラ患者あり，他は肝炎，十二指腸潰瘍，鉄欠乏性貧血などであまり珍しいものなし。</p>
11. 8	火	<p>前述のハルツーム病院をサルマ女医の案内で視察し，かつ患者の廻診と指導を行う。前述の病気のほか肝硬変，アジソン病，リウマチ性心疾患などの患者をみる。病室は数棟あっていずれも不潔であり，悪臭がたがよう。最も古い建物は今世紀初頭まだイギリスの統治時代に建てられたもので古いレンガ作り，代表的医療機器としてレントゲン操置を先ずみたが，2台はドイツ製，1台はイギリス製，あらゆる部品がこわれ，写るのが不思議な程，レントゲン技師も感電の可能性がありこわいともらしていた。コバルトのアイソトープによる悪性腫瘍の治療が2台の操置によって行われていた。上咽頭痛，悪性リンパ腫，ホジキン氏病などが多いという。</p>
11. 9	水	<p>本日講義の予定であったが，JICAよりの携行機材が入手出来ないので粗末な黒板に図を書き，雑巾で消しながら講義した。場所はハルツーム大学医学部の講義室，題目は糸球体腎炎・ネフローゼ症候群の免疫学的発症機序，対象者は医師，大学院生など30名程，ノートをとる者も多く，興味を引いたらしく質問も活発であった。日本への留学希望者が多かった。</p> <p>携行機材については我々のハルツーム到着より遅れて7日のBA便でハルツームに着いたが，税関の内容チェックがあり，第1にハルツーム大学医学部が提出した書類に記して内容と物品が異なること（携行機材はTV，VTR，映写機などで，ハルツーム大学の申請書は顕微鏡となっていたらしい）。第2にこれらの機材の輸入を極度に制限しているなどの</p>

月 日	曜 日	内 容
		理由で、結局帰国するまで渡してもらえず、税関の倉庫小屋に眠ったままであった。大学当局、日本大使館からも交渉してもらい、入手すべく可能な限りの努力をしたが無駄であった。後事は日本大使館甘利氏に託した。なお太田の持参したTVカセットはハルツーム大学医学部の医学部長秘書に直接手渡し、VTRが大学当局へ渡ったら使用して欲しい旨伝えた。
11. 10	木	早朝よりオムドルマンの熱帯病病院へ出向く。病院内を視察し、患者を診察し討論を行う。住血虫疾患が多い。住人の多くはナイル河などで本症に罹患しているとのこと。我々にとっては珍しいカラ・アザールの患者も診た。
11. 11	金	休日
11. 12	土	モハメッド小児科教授の案内で関場教授と一緒にハルツーム市より数十km東南の地方の保健所を2カ所視察し、かつ助産婦の仕事をみる。地方の医療状態は貧困そのもの。
11. 13	日	ハルツーム大学医学部の内科学教室を視察す。狭く小さい。機械・器具類も乏しく、まともに研究出来る状態ではなさそうである。 以上で予定をほぼ全部消化し、カイロ経由で17日17時、無事成田に着く。

国名 スーダン
指導科目 産婦人科学
派遣先機関 ハルトゥーム大学医学部
専門家名 関場 香
赴任時現職 岡山大学医学部産婦人科学教室教授
派遣期間 1983. 11. 3 ~ 11. 7

業 務 報 告 書

教育施設：この国の医学レベルの実態を知るためには、先ず学生教育を見る必要がある。そこでその教育施設をみると、特に印象的であったことは、図書が英国のものに著しく偏っていたことである。世界的視野に立って教育するにはもっとアメリカの図書も利用すべきであろう。尚、視聴覚教育への努力は設備は貧弱であるがそれを志向する傾向は認められた。

講義：第1回目の講演は「内視鏡による子宮癌の早期発見」の演題でSoda病院のカンファレンス・ルームに於て行う。この国の子宮癌は殆ど全部といって良い程末期癌の状態で見られており、殆ど治療法がないのが現状となっている。そこで本疾患の早期発見は極めて大切な課題となっている。したがって聴講者は約60名であったが殆どが産婦人科医であり、一部学生といった状態であった。スライドで理解しやすく説明した為かあるいは初めて見る私の走査電子顕微鏡写真のせいか熱心に聴いてくれ、講演後は沢山の質問が出た。

確かな手ごたえが感じられた。

尚、最初予定していた第2回目講演「子宮癌の手術療法」はFilmを使って行う予定であったが、Film、映写機共に最後まで空港で受取ることができず、中止の止むなきに至る。この国では子宮癌の手術ができる人は一人も居らず世界のトップレベルにある日本の子宮癌手術手技が映画を見ただけでは理解されるとは考えられないが、私の当初の考えでは映画で充分説明しておいて、続いて実際に手術を供覧して指導するつもりでいた。しかしその機会もなく、持参し供与した手術の機具の詳細な説明すらすることができなかつた。また私自身のフィルム「超音波断層法による胎児奇形の診断」も映写機がなかったため講演することができなかつたことは残念であった。

供与機器の説明：私が持参した機器の中、空港で受取ることができた胎児心博動検出器、子宮頸癌手術機具について講演会の後で説明する。

彼らにとって初めて見る胎児心博動検出器についてはその原理から詳しく説明し、次いで使用法の説明、続いて実習となる。実習は実際の患者を使って数多の医師により実習された。最終的には上手に使いこなせるようになった。この機器は恐らくこの国で役立つであろう。しかし重症妊娠中毒症の多いこの病院に妊産婦のモニター機器が一台もない事は困ったものだと思われた。

尚、子宮癌手術器具の説明は、後日子宮癌根治手術の私のフィルム上映後、詳しく説明することにして、この日は簡単な説明に止める。

病院の現況：(大学附属Soba病院)；ソビエトにより結核病院として砂漠の真中に建設供与された病院であるが現在総合病院として大学医学附属病院の機能を果している。この国では最も近代的な病院である。それでも日本のそれに比べると誠に粗末な設備と低い衛生環境にあると言わざるを得ない。

がん関係、特にアジアに多いとされる絨毛癌の多い事は驚いた。このことは世界にも未だ知られていない事であろう。その他、入院患者の約半数が妊娠中毒症の重症のものであり、妊婦管理の重要性が感じられた。中毒症の原因は調査の必要があるが、先ず栄養の不足、住血吸虫を含む感染症、高度の妊婦貧血などが考えられた。尚、苛酷な生活条件も無視できない因子となっていると考えられる。(Khartoum Teaching Hospital)；実病床数1500床の病院であるだけにActivityは高い。しかしここは病院と呼ぶには余りにも不衛生な環境である。特に産婦人科は病床数が少ない関係でみじめな状態であった。ここで特徴的であったのは、低開発国に限ってみられる膀胱腔瘻(難産のため膀胱に吼があいて腔にもれるもの)の患者が多いことであった。その予防対策と治療方針などについて詳細な討論と指導を行う。Prof. Naeimは若い誠実な情熱のある医師であり、この様な人を日本で修練させれば将来この国に大変役立つと思う。

手術手技レベルの現況：大学附属Soba病院のHadad教授により子宮筋腫、子宮留血腫、完全子宮脱の手術が行われた。ドイツGöttingen大学のKuhn教授は二度来日しており日本の手術の現況を知っているのでそれをふまえてスーダンにおける手術の現況分析を行った。その結果、この国で最も手術のうまいHodad教授の手術であるが荒削りな手術は熟練した医師には許されるが学生教育をふまえた大学の手術は基本に忠実な安全な手技を指導してゆくべきであるというのが吾々の結論であった。

未熟児室：(Soba病院)；大変よく整備されていた。ここだけがこの国の病院では異質と感じられた。Prof. Omarの努力の結果であろう。近く日本から保育器2台が入る予定ということで大変喜んでいて。この人なら大事にその器械を使いこなしてくれるであろうと思う。(Khartoum Teaching Hospital)；2台の哺育器は故障のままであり、酸素を送るパイプは機能していない状態で極めて不衛生な状態の中で極小未熟児が哺育されている現状であり、未熟児室の看板を標示するにふさわしくなかった。

周辺部落の助産婦活動の調査：この国に重症妊娠中毒症患者が大変多いことが気になったが、そこへハルツーム大学の小児科主任教授Prof. Omarより、ハルツームでは低体重出生児(普通のお産であるのに大変小さい子供が生まれること)が25%もあり、大変困っているので、ハルツーム周辺の小部落の助産婦活動の実態と周産期管理並びに分娩の取扱いについて見てほしいとの要望が出されていた。これは私がかねてより希望していたことであり、この領域の実態を知り、これを今後の指導の資料とすることは大変有用なことであるので是非見

せてほしいと返事をしておいたのである。2つの部落をみたが、夫々の部落に小さな診療所がある。その内部を案内してもらった後、取扱う患者の主な疾患、可能な検査項目、薬品の種類、治療の限界などについて診療所の医師より簡単な説明をうける。ついで、夫々の部落の助産婦に会って説明をきく。その実態は日本が約30年以上前にそうであったように、90%以上のお産が助産婦による家庭分娩であった。この国の病院の現状から考えて助産婦の活動が周産期管理上極めて大切な役割を演じているようであった。ここで得られた情報から低体出生児の出産の主な原因は妊娠中毒症が考えられるがその原因として既に述べた①妊婦の栄養不足②高度な妊婦貧血③住血吸虫を含む感染症が考えられたが、それだけでは説明できない不明の因子もあるように思われた。

感想：このたびスーダン（ハルツーム）に供与される病院を主軸にして国際的医療協力を行うに際し、これを成功させまたスムーズに運営してゆくためには是非共理解しておく必要があると感じた諸点について私見を素直に申し上げ参考に供したい。

1. イスラム教の国では金持ちが貧しい者に何かを与えるのはあたりまえのことで彼らはアラーの神に感謝はするが与えた者には感謝しないのではないかということを感じた。即ち、今後岡山大学の医師達が国際協力の一環として医療技術を提供する場合、彼等医師は恐らく一生懸命努力するであろう。それと同時に彼等（スーダンの医師）から感謝されるであろうという気持ちを最初から持つとすればこの事業はその第一歩を誤ることになる可能性があるということである。彼等が感謝するのはアラーの神に対してであることを良く理解させて派遣する必要があると思う。
2. 低開発国、被援助国すべてについて言えることかもしれないが、何となく援助ずれしているのではないかという印象を持った。更にアラブ人特有の「プライド」が複雑に咬み込んでいることも見逃せない。したがって派遣される医師に対し、恩きせがましい考えは一切持たせずただひたすら国際的な義務の遂行であるという認識を徹底させる必要がある。
3. 公務員を始め一般の勤務時間は午前10時より午後2時のようであるが私の見た所、調査した所では10時から12時過ぎまでの約2時間が一日の就労時間のように思う。一方岡山大学より派遣されると思われる助手以上の医師は平均一日10時間以上仕事をしているように思う。この勤務時間に対するギャップを事前に十分理解させると同時に勤務時間以外のFreeの時間の過ごし方についても深い配慮と理解をしてやる必要がある。この点は極めて困難なことのひとつと考えられる。

以上をふまえて、今後スムーズに協力事業を推進するためには、ハルツームの要望するものと吾々が援助しようとするものを一致させる必要がある。

援助には①相手側の要望するものを援助する方法と②相手側の要望とは無関係にその国の現状あるいは将来にとって是非必要なものを援助する方法があると思う。ハルツーム医療の現状から考えて第1の方法すなわち相手の要望を十分に理解してそれを主軸にして援助の輪を拡げてゆくことが適当と思われる。そのために吾々が現地の状況を把握することも必要で

あるが、何よりも必要なことは短時間でよいから彼等に日本の医療の現状をよく見せた上で要望事項を決定させると共に日本の指導の仕方、勤務状況なども併せて理解させることが肝要であろう。ただし、日本に留学させるスーダン人の人選は重要であり、この協力事業の意味を本当に理解し、推進する者を選ばなければならない。極めて強い日本留学の希望を持つものでも甚だ不適當な人物もあり、事前に検討して決めなければ本事業推進の障害となるように思う。

以上、簡単に所感を申し述べました。

業 務 日 誌

月 日	曜 日	内 容
11. 3	木	成田空港に於て、持参する荷物3ヶを確認し、午後10時30分定刻にJALにて成田を出発、Sudan国に向う。
11. 4	金	ロンドン空港、濃霧のため着陸できず、フランスのドゴール空港に着陸しロンドン空港の霧の晴れるのを待機する。パリ時間2時過ぎドゴール空港を飛び立ちロンドンに向う。ロンドン空港に現地時間2時過ぎに着陸す。ここで3時15分発のB. A. に乗り替えてハルツームに向う。乗替え時間が1時間足らずであったため、荷物の積み替えができたかどうか心配する。
11. 5	土	午前2時ハルツーム空港に到着し、大使館より山口氏、ハルツーム大学より医学部長代行Mukhtar教授およびNaeim教授(産婦人科)の出迎えを受ける。吾々が心配していた通り荷物はついていなかった。荷物は恐らく月曜日に着くであろうとの事であった。その手続きを済ませてホテルに到着したのは午前4時となる。少しの睡眠をとった後10時30分大使館へ挨拶に出頭する。続いて11時ハルツーム大学医学部に行き、医学部長代行のMukhtar教授と今後の日程について打合せる。しかし講演や技術指導の資料は全部荷物の中にあり、その荷物が未着で何時着くかはっきりしない状態では最終的な日程も立てられず、今後がいささか心配になる。本日は取りあえず、学生教育の実態調査として教育施設を視察。
11. 6	日	9時ハルツーム大学より迎えの車が来る。主任教授のHamid氏が外国出張中でassociate prof.のDr. Naeimがしばらく世話をしてくれることとなる。Dr. NaeimとSoba病院(ハルツーム大学の附属病院)

月 日	曜 日	内 容
11. 7	月	<p>に行く。</p> <p>丁度来合わせたドイツGottingen 大学の産婦人科Kuhn 教授と共に手術室に入る。次いで病室を回診する。特に16才の少女で急速に増大する腫瘍があるので診断してほしいとのことで診察する。Sarcoma botryoides という珍しい腫瘍であり、その治療方針、予後などについて指導する。</p> <p>9時よりAssociate prof. Naeim の案内でKhartoum teaching Hospital へ行く。産科、婦人科、未熟児、新生児病室を視察。</p> <p>植民地時代、英国が作った病院に増築して大きくした公式1000床の病院（実際は1500床という）で厚生省管轄の病院であるが、ハルツーム大学の教育にも使っている。産婦人科病床56でどうにもならず、1ベッドに2人の患者が入院している。</p>
11. 8	火	<p>昨夜の便で吾々の荷物が到着した由、早朝大使館員が受取りに空港に行った所書類不備のため受取れないとのこと。荷物受取りには大学の者が同行する必要があるが大学のDeanと連絡がとれないので大使館へ来てほしいとのことであった。大使館で事情を聞いた後、私自身が大学に行き学部長代理Mukhtarに会って事情を説き、大学側の公式文書を持って大学の事務官および大使館員1名と私の3名で空港に行き交渉する。吾々の私物の入ったトランクは内容チェックの後簡単に引き渡してくれた。持っていた機器については胎児心拍動検出器と子宮癌の手術機具は引き取らせてくれたが、映写機、子宮癌手術フィルム、太田教授のビデオはどうしても駄目という。受取った機器は一応大使館に運んで保管する。こんなことで今日一日は終わる。</p>
11. 9	水	<p>昨日受取った機器をハルツーム大学へ運ぶ。産婦人科主任教授Dr. Prof. Hamid がエジプトより帰国していたので学部長代行のProf. Mukhtarと2人に持参の機器を寄贈する。続いて講演の日程などについて打合せる。第1回の講演は明日9時よりSobaの大学病院で「内視鏡による子宮癌の早期発見」について行う。第2回講演は13日（月）「子宮癌の手術療法」について映画を上映してその詳細なテクニックについて講演することを打合せる。しかしこのためには映写機とFilmをどうしても空港で受取らなければならない。その点は大丈夫だろうかと聞くと大丈夫という。それを信ずることにする。しかしその後Prof. Ham-</p>

月	日	曜日	内 容
			id は荷物の受取りについて一切の努力をせず、ただひたすらにハルツーム産婦人科は岡大産婦人科とcooperate してやってゆきたい。そのためには自分は日本に行きたい。大使館の人に紹介してほしい。と、ただそれだけを繰返し、仕方なく大使館の事務官に紹介した。しかし、遠く日本から荷物を持って来て何とか技術を伝えようとする私の気持ちを理解しようとはしなかった。わざわざここまで来た以上、一方的なことになっても何とかbestをつくしたいと思う。
11.	10	木	今日はじめて講演することができた。大学附属のSoba 病院で朝9時よりコンファレンスルームで「内視鏡による子宮癌の早期発見」についてスライドを使って行われた。講演後、昨日持参した胎児心博動検出器の使用方法を実地指導にて説明した。尚、子宮癌手術機器については12日(日)に映画で実際の手術をみせてその手技を理解した上で一つ一つについて説明することとする。
11.	11	金	今日はイスラム教の休日である。大学も病院も休み。明後日日曜日の午前中までにフィルムと映写機が受取れることを祈る。
11.	12	土	朝9時にホテルを出発。ハルツール大学の小児科主任教授Prof. Omar と共に自動車約1時間30分の所にある小さな部落に行く。診療所を案内してもらい報告をうける。特に助産婦活動の実態について視察を行った。帰途、大学附属のSoba 病院に立寄り、未熟児室を案内してもらう。
11.	13	日	今日は12時よりSoba 病院に於て、持参したフィルムと映写機を使って子宮頸癌の手術術式について講演する日である。この国では子宮癌の手術のできる人は誰もいない現状から医師からの期待も大きかった。しかし講演をするためには未だ空港の倉庫に保管されている映写機とフィルムを入手しなければならない。この受取りについては大使館の方でも大学に任せましようとのことであった。先ず10時に大学に行きその件について産婦人科Hamid 教授に尋ねた所、未だ受取っていない。その件については医学部がやっているからそちらでやってくれという。医学部長秘書に尋ねると今から事務の者が空港へ行くから一緒に行ってほしいとの返事で、しばらく医学部長室で待つようにとの指示であった。ここで12時まで待たされ、結局今日は誰もゆかないから明朝10時に再度来てくれとのことであった。しかしたとえ明日フィルムを受取ること

月 日	曜 日	内 容
11. 14	火	<p>ができて明日は手術日である。手術関係者は皆、手術室にいる。その時間に手術手技の講演をしても全く無意味なことである。</p> <p>ここで子宮癌手術手技に関する講演は断念するの止むなきに至る。</p> <p>今日はハルツーム到着以来の出来事を顧みて反省とまとめをすることとする。結局、ロンドン空港の濃霧による航空機の延着がすべてのつまずきの因となり、所期の目的を完遂することができなかったことは返すがえすも残念である。同時に国際協力の難しさをしみじみ知った次第である。</p>
11. 15	水	<p>問題の多かったハルツームを発って帰国の途につく。</p>

国名 トルコ
指導科目 人口家族計画
派遣先機関 人口家族計画セミナー（トルコ厚生省）
専門家名 村松 稔
赴任時現職 国立公衆衛生院衛生人口学部長
派遣期間 1983. 9. 10 ~ 9. 19

業 務 報 告 書

今回のトルコ出張はトルコ政府厚生省主催の会議「トルコにおける家族計画事業の改善」に、わが国 JICA を代表して参加し、今後の対トルコ技術協力の可能性を検討するために必要な資料の収集、情報の獲得が主な目的であった。

会議は9月13日より16日にかけて予定どおり行なわれ、トルコ国内の厚生省以下関連機関の報告と共に、UNFPA、USAID、INTRAH、JHPIEGO、FHIなど、すでに協力事業を展開している各種国際機関からのコメントが提出された。この機会にわが国 JICA の全般活動について紹介することが必要と考え、スライドを利用しての解説を行なった。

この会議の最大の目的は、1965年頃より実施されてきたトルコ政府の人口増加抑制・家族計画事業が、政治体制の軍事政権への移行などの情勢の変化によってやや鈍化していたものを再び活力を入れるためのデモンストレーションであると考えられ、特にこの再活性化を国際機関に印象づけることにより今後の援助、協力をより多く引き出す意図をもっていたものとみられる。

会議における討論と会議中に接触した国際機関の職員との会話から得られた印象をまとめ、今後の人口・家族計画におけるわが国政府ベースの対トルコ技術協力についての条件を挙げれば、以下の如くである。

(1) プラスの条件

- ① トルコ政府、ことにその厚生省は人口増加抑制、家族計画の普及に対する関心がきわめて強いと判定される。この背景には経済成長の停滞、出生制限に対する一般大衆の意欲の強さ、欲せざる妊娠の処理としての人工妊娠中絶の多さ（年間45万件）などがあり、その結果として1983年5月「人口抑制法」の公布となったものとみられるが、いずれにしても政府としての対応は意欲的である。
- ② トルコ人口は約4500万であり、協力の対象としては手頃のサイズといえよう。
- ③ これまでわが国のこの分野における協力は主としてアジアであり、最近ラテン・アメリカの可能性が出ているが、トルコは文化、伝統的にはこれらの地域とはかなり異質であり、新しい対象を求める必要という観点からは有力な候補の一つと考えられる。
- ④ 一般に今日のトルコの対日感情は良好であり、伝統的にヨーロッパ指向が強かったトル

コにも最近わが国に対する強い感心が芽生えつつある。

(2) マイナスの条件

- ① 人口増加抑制に対する反対意見が指導者の各層にあることは事実で、会議の席上所々にこれが述べられていた。ただし、一般大衆、ことに婦人層は出生抑制の知識、技術を強く求めていることも事実であり、人口抑制に対する反対論はむしろ、トルコ民族の歴史的優越感、周囲を取り巻く6つの外国の必ずしも友好的ではない態度、男性に多い伝統的な子沢山歓迎の思想といった状況から生まれると判断される。さらに、厚生省が中心となってこの事業を展開し、それが独走ぎみで他の関連機関が企画、予算割当などの面で無視されがちであることからのしつとがあることも考えられる。
- ② トルコの家族計画事業は年月的には新しいものではなく、1960年代の半ばから行なわれてきた。このため、アメリカを中心とする各種専門機関の協力事業がすでにかんがりの規模で行なわれており、従ってわが国が入る全く新しい余地はほとんどない。ただアジアの国々と違っている点は、USAIDの直接の介入はなく、その方針はアメリカをベースとする各種専門機関に予算を与えて、自らは間接的に協力する方針をとっている点である。
- ③ 近い将来(本年11月)総選挙を控え、その後の政治経済的条件が十分に確認できない。
- ④ トルコは地形的に東の大部分は砂漠であり、都市が少ない。これは限局されたプロジェクトをつくって農村に展開するには障害となるであろう。従って、もし、わが国の技術協力が行なわれるとしても、パイロット・プロジェクト的なものは望みがたく、トルコ政府の行なう全国事業の中に一部を占めるという形にならざるをえないであろう。
- ⑤ 会議の進行、事務の処理を観察して議論は多いが実行は遅く、能率の悪いことが目立つ(もっともこれはトルコのみに限った観察ではないが)。

総括

トルコの人口・家族計画はJICAの技術協力の新しい候補国になりうるが、すべての条件が有利であるとはいいがたい。今後トルコ側からの出方がどの位真剣であるかをみた上で、さらに検討すべきものとする。

業 務 日 誌

月 日	曜 日	内 容
9.10	土	11.05 成田発 LH659 19.00 フランクフルト着 Sheraton Frankfurt 宿泊
11	日	9.55 フランクフルト発 LH322 16.30 アンカラ着 Buyuk Alnkara ホテル宿泊
12	月	午前日本大使館訪問 松谷1等書記官他
13	火	トルコ国厚生省主催「トルコにおける家族計画活動の改善」をテーマと

月 日	曜 日	内 容
9.13	火	<p>する会議開始</p> <p>9.15～15.00 厚生大臣以下トルコ各界代表者のあいさつ及びFP に関する情況報告</p> <p>15.30～17.00 UNFPR, USAID, The Pathfinder Fund, INTRA, JICA 各機関参加者によるFP援助についての講演</p> <p>夜 厚生省主催カクテル・パーティー宿泊 Tunali ホテルに変更</p>
9.14	水	<p>午前 JHP I EGO, ノースカロライナ大学関係, Population Council N. Y. The Future Group Washington, I P A V S(チュニス) 各機関参加者によるFP援助についての講演</p> <p>午後 総合討論</p>
9.15	木	<p>午前 「家族計画推進のため、今後の国内活動と国際援助は如何にある べきか」をテーマとするワーク・ショップ開催</p> <p>第1グループ 政策, 計画, 調査</p> <p>第2 " トレーニング</p> <p>第3 " ロジスティックス</p> <p>午後 厚生省案内による社会探訪 文化人類学博物館, アタチュルク記念館</p> <p>夜 在トルコ・アメリカ大使館公使主催カクテル・パーティー</p>
9.16	金	<p>7.00～14.00 会議を離れ, アンカラ西方100kmのPolatli市 を訪れ, 公立病院(100床, 医師7名の規模)視察</p> <p>14.30～15.30 ワーク・ショップFinal Report 発表会出席</p> <p>16.00 会議閉会</p>
9.17	土	<p>午前 資料収集, 整理</p> <p>14.15 アンカラ発 KL542 アムステルダム経由</p>
9.19	月	<p>15.00 成田着 KL867</p> <p>なお 笹野については</p>
9.17	土	<p>9.55 アンカラ発 アムステルダム乗継ぎ</p>
9.18	日	<p>15.20 成田着</p>

田 中 南 米

アルゼンティン

ブラジル

コロンビア

エクアドル

グアテマラ

メキシコ

ペルー

ヴェネズエラ

国名 アルゼンチン
 指導科目 消化器内科学
 派遣先機関 アルゼンチン消化器病学会・消化器内視鏡学会
 専門家名 渡辺英伸
 赴任時現職 新潟大学医学部教授
 派遣期間 1983. 9. 3 ~ 9. 23

業務報告書

アルゼンチンの医療・医学の水準について

消化管病理学について：病理学的診断基準を十分に理解していない。例えば、未熟再生上皮（非腫瘍性上皮）を腫瘍性上皮と診断したり、分化型腺癌を腺腫と診断している。

病気を正しく診断する最も重要な部門がしっかりしていないことは大きな問題である。

所感・提言

- (1) 臨床医は比較的良好に日本の知識を学んでいる。しかし、病理医の診断に問題が多い。このため、内視鏡医など臨床医の診断の方が病理医のそれより正しいという変な現象がみられる。

病理医を育てることが大切である。筑波での消化管病理コースに毎年2名を送る必要があると思われる。

- (2) アルゼンチンを含む、ラテンアメリカの特徴として、獲得した知識を他の人にも教えるという傾向が少ない。

この点に関しては、CorbobaのSan Roque 病院のグループは教育にも熱心であった。特にDr. Higa (endoscopist)とDr. Piva (phthologist)はこの点でもすぐれていた。

- (3) 単なる技術協力や機材提供ということばかりでなく、物の考え方、(病変の分析の仕方) Micro的見方と巨視的見方との相関などを教育し、アルゼンチンの消化器病学がactiveに活動するように教育することが必要である。

業務日誌

月	日	曜日	内 容
9.	3	土	JAL 006 (747) にて東京成田を12:00に発ち、同日の11:30にNew York (JFK) に着く。JFK International Hotel

月	日	曜	日	内	容
9.	4	日		に泊る。	
				PA 201 (74L) にてN. Yを20:00に発ち、Rio de Janeiroを經由して、9月5日(月)の11:25にBuenos Airesに着く。Hotel Crillouに泊る。	
9.	5	月		JICAで、アルゼンチン滞在中の講演内容、講演方法や日時などの再確認、一部変更などを行なう。	
				大使館へ斉木大使を表敬訪問するも、結局会えず。	
9.	6	火		Juan Fernandez 病院にて、9:30~12:30まで講演。	
				題目:(1)「胃癌の発育・進展に影響する因子」……………渡辺	
				(2)「色症性腸疾患の診断と免疫」……………朝倉	
				出席者:約100名	
				反応:(1)の内容は少し難解であったとのこと(朝倉均氏の評)。	
				14:00~16:00:朝倉氏と今後の講演内容をどうするかについて検討する。より平易で、簡潔な内容とすることにする。	
				20:00~23:00:河合恒二、稲賀淑子の両氏を含めて、上述の内容変更についての意見などを求めると共に、アルゼンチンの	
				消化器病の実体について知ることを促してもらう。	
9.	7	水		AR 0560でBuenos Airesを発ち、Cordobaへ行く。San Roque 病院のDr. Antonio Higa と第4回コルドバ消化器内視鏡会議について打合せを行う。	
9.	8	木		9:30~12:30まで、San Roque 病院の病理で消化管の病理学に関する実地指導を行う。	
				13:00~15:00 Dr. Higaとコルドバにおける今後のJICA援助の内容、教育方針を話し合う。	
				20:30~23:45 第4回コルドバ消化器内視鏡会議。第1日目	
				(1)「色症性腸疾患の鑑別診断」について病理学的見地より講演(渡辺)	
				(2)円卓テーブル討論会—生検、細胞診の意義、適応—	
				出席者:45名	
9.	9	金		9:00~13:00まで、San Roque 病院の病理で、講演と実地指導を行なう。	
				指導内容:胃生検の見方、特に悪性リンパ腫、良性リンパ組織過形成、	

月	日	曜日	内 容
			<p>未分化型癌の肉眼的および組織学的鑑別について</p> <p>講演：「家族性大腸腺腫症の胃癌変」</p> <p>出席者：15名</p> <p>13:00~13:10 Cordobaでのテレビ放送のための討談「消化管癌の 治療と予後」</p> <p>20:00~23:30まで第4回コルドバ消化器内視鏡会議（第2日目）</p> <p>(1)「胃腺腫の臨床-経過と治療-」（朝倉）の講演</p> <p>(2)円卓テーブル討論会-十二指腸乳頭部・大腸癌変など について-に参加</p>
9.	10	土	<p>Privado 病院にて、8:30~12:30 まで講演と討論</p> <p>「胃癌の発育・進展に影響する因子」（渡辺）</p> <p>「色症性腸疾患の診断と免疫」（朝倉）</p>
9.	11	日	移動日-Cordoba から Buenos Aires へ
9.	12	月	<p>第21回アルゼンチン消化管病学会および第8回アルゼンチン消化器内 視鏡学会へ出席のため、Buenos Aires から Iguazu へ移動。学会は 外国（ラテンアメリカ、ヨーロッパ、アメリカ）からの出席者もあり、 国際学会に近い。</p>
9.	13	火	上述学会へ参加
9.	14	水	<p>Drs. Pardo, Rubio, Tani, 朝倉, 渡辺で明日のシンポジウムの詳細 な打合せ。Drs. Kido, 朝倉, 渡辺で講演内容のスペイン訳などを行う。</p>
9.	15	木	<p>9:00~12:00 「食道・胃の異形性病変」のシンポジウムに参加</p> <p>「胃腺腫の病理形態学的診断と自然史」（渡辺）</p> <p>「胃腺腫の経時的変化と癌化」（朝倉） を発表。</p> <p>出席者：600名</p>
9.	16	金	<p>14:00~16:30「消化管ポリポージス」のシンポジウムに参加</p> <p>「家族性大腸腺腫症の胃ポリープ病変について」（渡辺）</p> <p>「胃ポリープの分類について」（渡辺） を発表。</p>
9.	17	土	<p>移動日-Iguazu より Buenos Aires へ</p> <p>齊藤支部長宅へ招待（夕食）される。</p>
9.	18	日	現在、慶応大学医学部内科で学習中の、リカルド吉田君宅を訪問。
9.	19	月	<p>10:00~12:00まで、Fernandez 病院で講演</p> <p>「遺伝性消化管ポリポージス」（渡辺）</p>

月 日	曜 日	内 容
		<p>「消化管病変の拡大内視鏡とレーザ内視鏡」(朝倉)</p> <p>12:30~14:20 大島公使らと会食</p> <p>17:30~18:00 アルゼンチン斉木大使を表敬訪問</p> <p>20:00~ Dr. Rubio, Perdo, 河合恒二, 朝倉均, 渡辺英伸で 今後のアルゼンチンにおける消化器病学への援助, 課 題を話し合う。</p>
9. 20	火	<p>9:30~12:30まで, Pirovano病院の内視鏡部門と病理部を訪れ, 実地 指導を行なう。</p> <p>EA010(L10)で18:40, Buenos Airesを発ちNew Yorkへ</p>
9. 21	水	11:24着
9. 22	木	JL005(747)で13:30にJFKを発つ。
9. 23	金	16:10に成田に着く。

国名 アルゼンティン
指導科目 消化器内科学
派遣先機関 アルゼンティン
専門家名 朝倉 均
赴任時現職 慶応義塾大学医学部
内科学教室講師
派遣期間 1983. 9. 3 ~ 9. 23

業 務 報 告 書

1 講演・技術指導について

アルゼンチン消化器病学会・消化器内視鏡学会などのアルゼンチン全体の学会、コルドバ消化器内視鏡学会およびブエノスアイレス市立病院などの講演と技術指導の3つに大別される。

題目：

1) 第11回アルゼンチン消化器病学会

シンポジウム Displasia epitelio Gastroesofagica (食道・胃上皮の異型上皮)にて Elevated forms of preneoplastic lesions - diagnosis and treatment (隆起型前癌病変—胃腺腫の診断と治療)

2) 第8回アルゼンチン消化器内視鏡学会

シンポジウム Cirugia Endoscopica (内視鏡的手術)にて Laser in operative endoscopy (レーザー内視鏡)

3) 第4回コルドバ消化器内視鏡学会

胃腺腫の診断と治療
炎症性腸疾患の診断と免疫異常
上部消化管・下部消化管の実技指導

4) ブエノス・アイレス市立 Juan A Fernandez 病院

炎症性腸疾患の診断と免疫異常
拡大内視鏡とレーザー内視鏡

概要：

アルゼンチン消化器病学会における食道・胃の異型上皮のシンポジウムでは、渡辺が胃腺腫の病理について講演したが、私は胃腺腫の臨床経過を内視鏡および組織学的に検討した成績を述べ、胃の炎症性過形成ポリープに対して胃腺腫は癌化の可能性が高く、そのレントゲンおよび内視鏡的診断の要項と重要性を述べ、胃腺腫に対するレーザー内視鏡による新しい治療法の成績を紹介した。

アルゼンチン消化器内視鏡学会における内視鏡的手術のシンポジウムでは、消化器内視鏡領域におけるレーザーの理論と治療成績を述べ、上部消化管出血に対する止血、胃ポリープとくに胃腺腫に対する治療成績、胃癌に対する治療成績について報告した。

コルドバ消化器内視鏡学会においては、胃腺腫の臨床経過・診断および治療についての講演と、炎症性腸疾患とくに潰瘍性大腸炎とクローン病の病理、レントゲン診断、内視鏡診断、および免疫異常についての講演を行った。実技指導に関してはコルドバ大学の関連病院である市立 San Roque 病院の内視鏡室で、上部消化管と下部消化管の実技の指導を行った。

ブエノス・アイレス市立 Juan A Fernandez 病院においては、コルドバと同様、炎症性腸疾患の診断と免疫異常について、また拡大内視鏡の小腸病変における検討成績とレーザー内視鏡における治療成績について講演した。

対象者の水準：

アルゼンチン消化器病学会および消化器内視鏡学会の参加者については、会場がブエノス・アイレスから飛行機で2時間という離れたイグアスという立地条件より、アルゼンチン消化器病学会の中堅以上の指導者層が多かった。また、ドイツ、フランス、オランダ、スペイン、ブラジルなどからの参加者もあり、国際学会のような感じで会がすすめられた。

アルゼンチンからの参加者は国内経済の低滞により、日常の臨床・診療による収入が少なく、その生活費を得るためのアルバイトにおわれ、かつ公的な研究費がないために自分達の研究は殆ど出来ず、文献的な考察による発表が多かった。したがって、アルゼンチンの医師のみによる学会は現在の状態では成り立たないように感じられた。

コルドバにおける参加者は、消化器病を専攻とする内科医、外科医、内視鏡医および病理の医師が主であるため、熱心であったが、年に1回外国で研修してくる医師の水準は高かったが、全般的にはまだ遅れている感があった。

ブエノス・アイレスにおける参加者は、一般医師、レジデント、医学生、消化器病専門医など多彩であり、その水準を計ることは難かしい。

人数：

アルゼンチン消化器病学会・消化器内視鏡学会参加者は約600名、コルドバ消化器病学会参加者は約45名、ブエノス・アイレスの Fernandez 病院の聴講者は約100名

反応：

痛に対する関心がつよいためか、胃の前癌病変である胃腺腫に対して多くの参加者があり、著者らの長期にわたる内視鏡的・組織学的検討による報告に関心をもたれた。しかしアルゼンチンには胃腺腫例が殆どなく、臨床的経験がないものが、文献的な知識のみによって、誤った診断がなされている現況である。したがって、渡辺による腺腫の病理面での解説は、アルゼンチン医師にとって有益であった。

内視鏡面ではレーザーによる止血、胃腺腫や胃癌の治療への応用に関しては、強い関心をもたれた。アルゼンチンにはレーザーの機械はないが、ブエノス・アイレスに研究会が出来たと

ところで、腫瘍に対する治験成績に特に関心がもたれた。炎症性腸疾患に関しては、潰瘍性大腸炎はアルゼンチンでは少数みられるが、クローン病は殆どみられないということであるが、大腸疾患については大腸腺腫が多いためか、興味をもっており、疾患概念をつかむには有益であったと思われる。

2 受入国の医学・医療の水準について

医療全般

病院は100年前に建てられたものもあり、全般に老朽化している。

専門分野

医療施設については、レントゲンではX線テレビのある病院は少なく、二重造影もゆきわたっていない。内視鏡関係では、内視鏡が一旦入っても修理などのアフターケアが十分でないため、公的な内視鏡はファイバーのガラス線維が折れて使用にたえず、特定の医師が私費で購入した内視鏡によって診療が行われている。したがって医療の水準は一部の病院や医師は優れているが、医学とくに実験的研究は皆無である。

3 所感・雑言・提言

アルゼンチンは一部の人達はゆたかであり、その豊かさを享受しているが、一般の人々や公的なものは経済的に苦しい状態にある。したがって、ある分野をみると何故日本が援助する必要があるのかという感を抱くが、極めて貧しい人々がいるのは事実であり、又日本人移住者が必らずしも成功した地位についていない現在、また広い平野と農産物の豊かな国であるので、この国と強い関係を維持することは重要と思われる。

医学関係でも、1970年代日本に留学した人々が現在中堅以上の重要な地位につき、かつ親日的になっていることは、将来の日本の立場を考えること、このきづなは重要性を帯びてこよう。

今後の医療・医学関係におけるJICAの役割は、アルゼンチン側の明日の診療に役立つ実利的な面の講演、実技指導および診療施設の援助も必要ではあるが、近い将来も考えた医学面の講演も合わせて進めてゆくことが、アルゼンチン側の医学の芽をのばすには必要であるという印象を抱いた。

業 務 日 誌

月	日	曜 日	内 容
9.	3	土	10時 成田国際空港に到着。阪神航空の方と共に手続完了。 12時 JAL006便にて成田→ニューヨークと渡辺英伸教授と出発 日付変更線通過 11時20分 ニューヨーク到着 13時 International Hotel に入る

月 日	曜 日	内 容
9. 4	日	18時 ニューヨーク・ケネディ空港にて手続 20時 40分遅れて Pan nam 201便にてリオデ・ジャネイロ經由にてヴェノス・アイレスに向う。
9. 5	月	11時20分 ニューヨークから14時間かかってブエノス・アイレスに到着。空港に JICA 河合恒二氏が迎えにくる。 13時 Crillon ホテルに入る。 15時 JICA 支部を訪門し、支部長斉藤正次にあいさつし、今後の打合せを行う。 16時30分 日本大使館にあいさつ、しかし大使着任直後のため会えず、事務官稲賀氏に会う。
9. 6	火	9時30分 市立病院 Juan A Fernandez (ブエノス国立大学医学部の関連病院)を訪門し、消化器部長 Lubio 教授の司会のもとに朝倉が Inflammatory bowel disease 炎症性腸疾患を、渡辺が癌の進展形成について講演する。3時間にわたる内容であった。
9. 7	水	14時 Crillon ホテル出発 ブエノス・アイレス空港にゆく。 16時 アルゼンチン航空にてブエノス・アイレスより1時間かかってコルドバに着く。アントニオ、ヒガ氏が迎えにくる。 18時30分 Crillon ホテルに着き、ヒガ先生と日定の打合せ
9. 8	木	9時30分 国立コルドバ大学医学部の関連病院である州立 San Roque 病院にて、朝倉は上部消化管の内視鏡の実技のデモンストレーションを、渡辺は病理の指導を行う。3時間にわたって行われた。 20時~23時 市内コルドバ医師会館にて渡辺が、炎症性腸疾患の病理について講演、その後コルドバ医師による消化管の内視鏡診断と病理診断のパネルが行われた。
9. 9	金	9時30分~13時 前述の San Roque 病院にて、朝倉は下部消化管の内視鏡の実技の指導を、渡辺は病理診断の指導を行う。 20時~23時 前述のコルドバ医師会館にて、朝倉が胃腺腫 adenoma の内視鏡、X線診断とレーザーによる治療について講演、その後コルドバ医師による食道内圧、胃液などの上部消化管の病態生理のパネルが行われた。
9. 10	土	8時30分~12時 コルドバ大学の関連病院で、渡辺が胃癌の進展に及

月 日	曜 日	内 容
		ばす因子について、朝倉が炎症性腸疾患の診断と免疫異常について講演した。
9. 1 1	日	1 7 時 3 0 分 アルゼンチン航空にてコルドバ→ロザリヲ→ブエノス・アイレスにもどる。
		2 0 時 市内 Crillon ホテルに到着。
9. 1 2	月	8 時 3 0 分 Crillon ホテル出発 ブエノス・アイレス空港へ。
		1 0 時 3 0 分 ブエノス・アイレス→ロザリヲ→イグアスにアルゼンチン航空にて到着。International ホテルにつき、Pardo 教授と学会の内容の打合せを行う。
9. 1 3	火	XXI Congreso Argentino de Gastroenterologia VII Congreso Argentino de Endoscopia Digestiva II Simposio Internacional Sobre Ulcera Peptica IX Encuentro del Club Internacional del Duodeno が Federacion Argentina de Gastroenterologia, Sociedad Argentina de Gastroenterologia, Asociacion Argentina de Endoscopia Digestiva の主催のもとに同時開催の形で International ホテルの 2 会場と Esturion ホテルの会場に分かれて行われた。
		9 月 1 3 日から 9 月 1 6 日 8 時から 1 9 時まで研究発表が行われた。
9. 1 4	水	9 時～1 2 時 3 0 分 Esturion ホテルにてシンポジウム Cirugia Endoscopica で朝倉は Laser in operative endoscopy 手術的内視鏡におけるレーザーについて講演した。
9. 1 5	木	9 時～1 2 時 International ホテルにてムシンポジウム Displasia epitelio Gastroesofagico で朝倉は Elevated forms of preneoplastic stomach lesions - Diagnosis and Treatment を、渡辺は Pathology of gastric adenoma について講演した。
9. 1 6	金	1 4 時～1 6 時 Esturion ホテルにてシンポジウム Poliposis で渡辺は familiar polyposis coli について講演した。
9. 1 7	土	1 1 時 3 0 分 Iguazu の International ホテル出発 1 3 時 1 0 分 アルゼンチン航空にて Iguazu → Buenos Aires へ 1 7 時 Crillon ホテル到着
9. 1 8	日	休 日
9. 1 9	月	9 時 3 0 分 Crillon ホテル出る。 1 0 時～1 2 時 市立 Fernandes 病院にて、渡辺が遺伝性消化管ポリ

月 日	曜 日	内 容
9. 2 0	火	<p>ポージスについて、朝倉が拡大内視鏡とレーザー内視鏡について講演する。</p> <p>13時 大島公使と昼食</p> <p>17時 アルゼンチン大使斉木氏に帰国の挨拶</p> <p>9時30分～12時 市立 Pirovano 病院にて、内視鏡と病理の実習指導</p> <p>15時40分～16時20分 JICA支部への今回の指導内容と今後の方針についての意見報告</p> <p>18時40分 Eastern 航空にて Buenos Aires → Santiago → Lima → Miami → New York へ</p>
9. 2 1	水	<p>11時30分 ニューヨーク着</p> <p>13時 International ホテル着</p>
9. 2 2	木	<p>11時 International ホテル出発</p> <p>13時30分 JALにて New York → 成田</p> <p>日付変更線通過</p>
9. 2 3	金	<p>16時50分 成田空港に着く。</p>